

第 11 回 伊賀市中心市街地活性化基本計画策定委員会 議事要旨

- 日 時 : 2024 (令和 6) 年 11 月 21 日 (木) 10 : 00 ~ 11 : 40
- 場 所 : 伊賀市役所 501 会議室
- 出席者 : 久隆浩委員長、竹島博子委員、山本禎昭委員、中村忠明委員、南徹雄委員、濱津享助委員、木宮康介委員、平井俊圭委員、杉山美佐委員、濱崎久美委員、宮崎寿委員 (欠席 : 菊野善久副委員長、福永真司委員、松井隆昇委員、豊福裕二委員、竹島弘美委員)
- 事務局 : 産業振興部 堀川部長、福山次長
中心市街地推進課 森口課長、中澤主幹、乾主任、藤山
伊賀市中心市街地活性化協議会 山崎事務局長、上野商工会議所 佐治事務局長

1. 開会

2. あいさつ

久隆浩委員長よりあいさつ

3. 協議事項

(1) パブリックコメントでの意見について

- ・ パブリックコメントの意見では修正は加わらなかったが、せっかくご意見をいただいたので、実施の段階では取り入れられるものは積極的に取り入れていただきたい。(委員長)
- ・ 回答の文章が業務的に感じる。やわらかさも必要。お礼の言葉を最初に入れても良いのではないか。(委員)
 - 回答文章について、ニュアンスの修正を検討する。(事務局)
- ・ 7 番目の意見について、本計画は内閣府の定める様式通りに作成しないといけない都合上、ページ数の対応をするのは難しいと思う。一つの例として、芦屋市の環境基本計画では、今まで概要版とされていたものを計画本体とし、計画本体とされていたデータや説明を資料編と称して、概要版と本体を入れ替えた。最終的には、本体が A 4 の 8 ページで内容がすべて網羅されている計画書を作成した。このような事例も出てきているので、これからの他の計画づくりでは参考にしていきたい。(委員長)

(2) 国からの指摘事項への対応について

- ・ 歩行者等通行量の目標値について、「今後の計測をビッグデータを用いて行う」というのであればいいと思うが、ビッグデータと既存データを比較することに意味はないのではないか。2 つのデータを比較して係数を掛けるというのは、いささか乱暴に感じる。(委員)
 - 改めて、ビッグデータがどのような計測方法で数値を出しているか、整理させていただきたい。まず、データ会社が NTT ドコモユーザーのスマートフォンの GPS デ

ータを拾って実数を出し、そこに他の携帯会社のユーザーや全国の人口などから計算した指数を掛け、推計値を出す。あわせて、企業秘密ではあるが、この人口ではこのくらいの交通量があるという、実際の都市部のデータを基にした係数があり、その係数も掛けているとのこと。国曰く、その際に数値が大きくなってしまいう傾向があるとのことであった。ビッグデータは年間平均してデータを取得でき、通行量の推移をしっかりと見ていくことができるが、ビッグデータの値が大きくなっているため、市の実態にあわせて係数を掛けてはどうかという国からの意見であった。通行量の推移を市民の皆さんが見やすいように、見せ方を工夫するという趣旨である。（事務局）

- ビッグデータの値を実測値と比較すると、数値が1ケタも違っており、あてにならない、大きく膨らませてしまっていると感じた。推計値の出し方が分かれば対処の仕方があると思うが、その方法は教えてもらえないとのことなので、係数を掛け、補正することはやむを得ないのではないかと。そうすると実測値でいいのではないかという意見もあるかと思うが、ビッグデータは毎日取得できる。平均はどうか、また、大きいイベントの時の傾向はどうかなど、ビッグデータを活用することで見るることができる。ちなみに、他の方法の一例として、各通行地点にカメラを設置して、カメラのデータからAIを使って人を抜き出して集計するという方法もある。当然、予算や時間的な問題で今回からの実施は無理であると思うが、最終的には実施して、より正確に近いデータを取れるように検討していただくことを期待している。（委員長）
- 15 地点すべてにカメラを取りつけるのは予算の都合上、非常に難しい。計測地点をもう少し絞ると実現の可能性が上がってくる。事務局としても、今後検討していきたい。（委員）
- 将来的には、システム自体を作る人材を市職員として雇うことができれば適正な価格で分析ができるようになるのではないかと期待している。（委員長）

（3）計画書最終案について

- ・ 計画書の表紙については、大きな写真のところに中心市街地の各スポットが浮き上がる楕円をいくつか入れるなど、動きを感じられるような工夫があると良いと思う。市民の中にもデザインができる方が一定数おられると思うので、そのような方に市で費用を負担してデザインをお願いするという方法をとっても良いと思う。（委員長）
- ・ 【参考資料】のフォントや図について、余白があるページについてはもう少し大きくしても良いのではないかと。（委員）
 - みんなが読みやすいよう、可能な限り工夫させていただく。（事務局）
- ・ 4～8章における事業に関する事項について、初めて見た人にとっては、項目の分類が分かりにくいのではないかと感じる。例えば、色で分類するなど、ビジュアルを工夫していただきたい。また、102 ページは文字が小さく、103 ページは活字だけのため、このあたりもビジュアルを工夫していただきたい。（委員）

- 昔の電話帳のように、ページの右端に色を付けて分類してはどうか。(委員)
- 102 ページの事業実施箇所図に4～8章の事業がそれぞれ色ごとに分類されている。この色を各章に反映すれば見やすくなるのではないか。(委員長)
- 国で定められたフォーマットで作成しているため、ご指摘いただいた通り、分かりづらい部分もある。フォーマットを変えられない部分もあるが、どの項目がどこにあるのかがすぐにわかるように、可能な限り整理したい。(事務局)
- ・ 「ふれあいプラザひまわり運営事業」について、これからも継続していく方針なのか。(委員)
 - 11月に工事完了の期限が到来し、今後の方針を担当部署と事業者で話し合っている。現時点では、何とか継続の方向で協議を進めていると聞いている。次の展開が公表されれば、その内容も踏まえ、来年度以降に見直して、計画に反映することとなる。(事務局)
- ・ 中心市街地と周辺地域との連携はどのように考えているか。(委員)
 - 計画書本文には、中心市街地活性化の効果を周辺地域にも波及させて、最終的には市全体を活性化させることに繋げると記載している。事業についても、中心市街地の事業を中心としているが、周辺への波及に繋げていくことをテーマとし、今後取り組んでいきたい。(事務局)
 - 中心市街地へ人を流すためには、周辺の観光施設等ともうまく連携して、そこに訪れる方を中心市街地へ流していくという戦略も考える必要がある。伊賀市は複数の市町村が合併してできたことから、旧町村が作った道の駅や温泉等の施設が残っているため、このような施設をつないでいくことも考えられる。観光客が増えれば、バスや電車の便も増えることに繋がるため、立地適正化計画や交通計画とも連動して考えていただきたい。(委員長)
- ・ 全事業の一覧が載ったページはあるか。(委員)
 - 103～105 ページに目標別に関連する事業としてまとめている。(事務局)
 - これだと各事業がどのページに載っているのかがすぐにわからない。見やすさが必要。(委員)
 - 全体的にフォントを拡大したうえで、各事業の右横にページ番号を記入し、目次のようにしてはどうか。(委員)
 - 分かりやすく整理できるよう修正を検討する。(事務局)
 - 紙媒体には限界があると感じている。デジタルであればページ番号をクリックするだけで見たいページに移動することができるため、デジタル版を作成する際には工夫を検討いただきたい。(委員長)
 - デジタル版について、市でも他の計画等で導入され始めてきている。ただし、大きなコストがかかるため、本計画は紙での発行を考えている。その分、見やすくなるように工夫したい。(事務局)

(4) 今後のスケジュールについて

意見なし

(5) その他

- ・ 三重県下において、中活計画の認定を目指す団体、または、認定を受けた自治体はあるのか。
(委員)
 - 今年度の認定申請については、伊賀市のみと聞いている。また、過去に認定を受け、現在も計画期間中の自治体は伊勢市のみである。(事務局)
 - 以前は、多数の自治体の中活計画を作っていたが、総務省が活性化のハードルをかなり上げたため、認定を目指す自治体は減少した。伊賀市も、継続して中活計画を作成し続けているが、どれだけ活性化の効果が出ているか。今回は、しっかりと活性化を目指し頑張っていくことを期待している。(委員長)
- ・ 計画は実行できるかどうかが大切である。自分が所属している団体では、年に2回実行部隊の皆さんを集めて反省会をし、今後どうするかを検討している。中活計画も、第一線で頑張っている皆さんがいるので、是非実行に向けての取組をお願いしたい。(委員)
- ・ 策定委員会で何度か紹介させてもらっている茨木市の文化複合施設「おにクル」について、開館から1年間で190万人の来館者があった。1つ魅力的な施設があれば190万人が来るということが分かる。おにクルの前身である老朽化した文化ホールの活用について、前市長は建て替えないとの方針であったが、現市長は文化ホールに相当する施設が必要とのことで建て替えを決定した。この時、市長は、税金を投入するだけで建て替えてしまうと、誰も使わなくなる箱物行政の施設になると感じ、当初から徹底した市民参加を行った。オープニングセレモニー、1周年記念イベント等でも、市民が実行委員会を立ち上げて自らイベントを動かした。市民の魂が入った、自分たちの施設であるという意識があるからこそ、190万人という来館者があるのだろう。ここが、最も重要なポイントであると考えている。(委員長)
 - 発足時は、市が事業を提案して市民を募集したのか、市民から行政にやってほしいと要望があったのか。(委員)
 - 茨木市には、事業者がまちづくりを行ってきたという歴史がある。色々なイベントについても市民自らお金を出し合って運営しているという土壌がある。市長は、そのような元気のある人たちに一緒に施設をつくろうと呼びかけた。市民参加の第一弾では、100人会議という無作為に抽出した市民と10人ずつ、10回の対話を行った。また、合計で108回のワークショップを行い、のべ3,000人以上の方に参加してもらい、意見を出してもらった。市長は、一度も利用したことのない方に納得していただかないと多額の税金を投入して施設を作ることはできないと、文化ホールを一度も利用したことのない人ばかりに集まってもらったこともある。市職員、指定管理者の運営側のルールとして、「できません」を言わないとしており、どうすればできるのかを提案した人と一緒に考えるようにしてもらっている。伊賀市の新図書館についても、さらに多くの市民の方と関わっていただき、計画づくり、内容づくりを行っていただくことを期待している。(委員長)

- ・ 計画をつくると、それで終わってしまいがちであるが、計画の進捗管理や社会情勢に基づく修正等が発生した場合の対応はどのようなになっているか。(委員)
 - 計画の進捗管理について、1期2期においては年に2回、事業の進捗状況を共有し、目標達成率のチェック、課題分析、今後の取り組み等について検討を行っている。3期についても継続して取り組んでいきたい。(事務局)
- ・ 市民の参加という観点では、ワークショップの開催はおもしろく参加しやすい。計画には、いろいろなテーマが盛り込まれており、テーマごとにワークショップの場が出来上がっていけば、主体性も高まり、より活性化するのではないかと思う。(委員)
 - 既に動いている方、これから動こうとされている方を中心に集まっていただくこと、何とかしてくれという方ではなく私がやりましょうという方をどれだけ集められるかがポイントであると思う。人が元気になればまちも元気になるため、期待している。(委員長)
- ・ 市職員は、市民からこんなことをやりたい、と言われた際に、できませんと言わないことは大変重要なので、今後はどうすれば一緒にできるかを考えていただき、ポジティブ思考で実現に向けて取り組んでいただきたい。そういう事例が増えてくれば、どんどん市民も参加していただけるようになるのではないかと期待している。(委員長)

以上